



# 新 生

第 48 巻 号  
秋 新 生 会 広 報

われら四方より患難を受くれども窮せず、爲ん方つくれども希望を失はず、

—コリントの信徒への手紙二 第4章8節—

*We are troubled on every side, yet not distressed; we are perplexed, but not in despair;*

—1ICORINTHIANS 4:8—

## 創立者の思い

広田勝一

日本聖公会は、米国宣教師チャニング・ムーア・ウィリアムズ主教によって、一八五九年その礎が据えられた。さらに一八七四年には、築地居留地の一角に立教学校を創立した。当初生徒は五名とも八名ともいわれ、聖書と英語を教える小さな私塾であった。主教と出会った人々は、その謙虚さと高潔な人格に感銘を受けてきた。日本在住五〇年、熱意ある開拓精神、切りつめた生活、業績を誇らない謙虚さ、何よりも自分ではなく神に栄光を帰する歩み、帰国に際してはごく限られた人だけに伝え、船上から神の祝福を祈りつつ日本を離れる主教のその生涯は、「道を伝えて己を伝えず」この言葉に集約される。

後日有志は、故郷バージニア州にある墓地に追墓碑を建て「創業ノ難ヲ排シ堅忍能ク日本聖公会ノ基ヲ奠ム・・・日本在任五十年道ヲ伝ヘテ己ヲ伝ヘズ・・・」と刻んだ。ウィリアムズ主教の神に対する姿勢を倣いつつ、改めて一五一年前の立教学院創立者の思いを想起する。

聖書には「あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを思い出さない。彼らの生き様の結末をよく見て、その信仰に倣いなさい」（ヘブライ人への手紙一三章七節）とある。そして日本聖公会を母体とする榛名聖公会は、新生会と歩みを共にしてきた。新生会の礎を振り返れば、その母体は一九三八年の結核保養所榛名荘にある。榛名荘が創立され、建物が落成された折、当時の原正男理事長と共に歩んできた聖ヨハネ修士会の木村兵三司祭はこう語った。「人の事業は人と共に滅びる。真理と愛とに基づく神の事業は、必ず成長する」。こうした原点から始まった榛名荘、そして新生会の精神が、この言葉によく表れている。また創立者原正男の確信は、「すべてのこと相働きて益となる」（文語訳聖書ロマ書八章二八節）にある。善きことも悪しきことも、成功のみならず失敗も、健康も病も、利得も損失も、神が私たちと共に働いて、益としてくださる、こう語るパウロの言葉である。創立者の思いがここにある。共に創業の精神の継承を目指したい。

### 広田勝一

一九五〇年生。立教大学大学院文学研究科組織神学専攻修士課程修了。日本聖公会北関東教区主教、立教学院院长を経て、現在立教学院チャプレン長、日本聖公会主教、新生会評議員。



珍しきかな

新たな心もて

あらたに迎うる今日の日は

珍しきかな

新たな力もて

あらたに作る今日の日は

珍しきかな

新たな望みもて

あらたなる道をゆく

物みな輝きて映る今日の日は

珍しきかな

後藤静香著

「天よりの声」より



原 慶子

四十年ぶりのリトリート

「育み合う・分かち合う・支え合う」

新生会の仕事、私のライフワークとなつてかれこれ五十年になりました。自分の暦の年令のことも考えず、夢とヴィジョンをもつてひたすら走り続けました。この一年は色々あつてストレスもありましたが、前向きには変りなく、神のみ心を信じて祈りつつ、一方ではゆつくりこれからの新生会の体制の在り方についても考えたいと思いつつ、中々その時が与えられず、精神的にゆとりのない生活をしていたようです。振り回されるといふことはありませんでしたが、次々と起る様々な出来事への対応に追われていたといふことでしょうか。それが突然七月の終り頃から私の体に異変が起りました。そこで病院に行き、さっそく治療のために高崎総合医療センターに入院することになりました。（八月五日）それから三週間足らず、専門医の適切な治療を受けて、八月二日退院に至りました。思いかげず、待ちに待った「考える時間」が与えられませんでした。三食昼寝つき、思いは深くこれからのことを具体的に考察すること

ができました。来し方行く末というのは、新生会の創立から私が関つた月日についての反省と事業継続のために何を大切にしてきたか。そしてこれからの新生会の事業が、積み上げてきた土台と創業の精神に則つて時代状況に即応した経営を行つていくことなど、次々とアイディアが浮かぶのでした。

先代理事長、原正男の遺稿集のタイトルは「我を我より高き崖下（がいか）に置き」、追悼集のタイトルは「不動の信・徹底の愛」というものでした。まさに原正男の一生は上記の二つの精神を貫きました。私たち新生会の仕事もこの精神が根幹にありました。この二つの精神を実践化するために原正男はさらに三つの処生訓を私たちの目標に据えました。『凡てのこと相働きて益となる』『どんな困難な出来事も取り組み次第で有益なものになる』といふことです。『分かれ争うとき家も村も亡びる』『一人一人助け合い支え合つて行きましよう』といふことです。私的には「C・S・C」Culture（育み合う）・Share（分かち合う）・Care（支え合う）といふことです。『裁くなかれ裁かざれんためなり』相手の罪を裁くのではなく、自らが反省しましよう。これからの新生会の指標となるものです。

この夏、原慶子先生のお招きにあずかって、貴会の教養講座でお話しさせていただきました。ご提唱の「福祉の芸術化」や「HALC」といった理念。それはまさに、微力ながら小生が教育の分野で探究してきたこととだけ、深いご縁を予感して、先達との出会いに心を躍らせていました。

講演に先立ち、ギャラリーの如き廊下を歩み、会場の芸術ホールの光につつまれ、お願いして御聖堂に案内していただきました。そしてホールに集われた老若男女の方々の静かな存在感。その佇まい、その気配から、予感がほんものであったと知りました。

ここでは、遠慮なく、ライフワークのなかで最も大切にしてきた核心をお話しできると思いました。です。ので、「教育芸術」を提唱した。シユタイナーの理念に基づくシユタイナー学校づくりの実践(NPO法人京田辺シユタイナー学校、二〇〇一年創設、生徒数約二七〇名)について、真正面から講話しました。

「教育芸術」というのは、芸術家を育てる教育、芸術を教える芸術教育ではありません。たしかに、シユタイナー教育では、当日もスライドを使って様々にご紹介したように、学校の授業や校舎教室が美しいものに満たされるよう工夫します。とは

いえ、芸術を用いた教育でもありません。教育という営みそのものが、ひとつの人生芸術であるという、「芸術としての教育」です(C.R.シユタイナー著『教育芸術(1)(2)』筑摩書房)。まさに「教育の芸術化」をめざしているのです。

人がこの世に生を享け、そだち、まなび、人と出会い、世のためにはたらき、老い、そして今生をまっとうしていく人間形成の営みは、それ自体が、ひとつの芸術といっても過言ではありません。それがどのような

## 論壇

### 福祉と教育の芸術化を希求して

シユタイナーの「教育芸術」より

大阪公立大学・名誉教授 吉田 敦彦

な作品になるか、あらかじめ、完成図を描いておくことはできません。十人十色である一人ひとりが、この世に存在している意味はみんな違って、決してコピーするように再現できません。そのつどの呼びかけに応答しながら、人や世界と出会い、対話し、一回きりの人生を歩みます。そこに一つの生・いのちの形が表現していきます。芸術モデルの人間形成。それは、教育する側が期待する人材像を一律に掲げ、設計図どお

りに大量生産していく工場モデルとは程遠いものです。社会に有用な人材育成の機関として制度化された近代の学校では、そのような人材生産モデルに陥りがちです。だから、私たちは、既存の制度に縛られない、人と人との生きた出会いのなかで、もうひとつの学び場を手作りしてきました。

呼びかけ(Callings)に応答しながら自らが存在するミッションに気づき、それを成就していく自己実現の歩みをケアし支援すること。こう

した「教育芸術」での人間支援の営みは、もはや「教育」という言葉では狭く窮屈になり、人の well-being を実現していく「福祉」の営みに限りなく近づいていきます。ですから、小生は大学に勤めた最後の一〇年間、「教育福祉学類」という新しい学部学科を創出することに尽力しました。目指したのは、本来、根元的には一つであるはずの福祉と教育にかかわる営みの芸術化に他なりません。

そしてそれは、制度やシステムによって実現するものではなく、総体としての文化の熟成によって可能になるものです。シユタイナーは、「社会の三分節化」という理念を持ち合わせており、政治や経済の領域に文化の領域が呑み込まれてしまうことを厳しく戒めました。そして、政治／経済／文化の三つの自律的な領域に、平等／友愛／自由を割り振りしました。すなわち、平等は政治(法)の領域で、友愛は経済の領域で、そして人の精神の自由は文化(芸術・宗教・教育・科学)の領域で実現しようとしたのです。\* Human Art Life Care を通した「文化としての人間福祉」の実現という新生会の理念に、これは深く共鳴するものです。

夏の教養講座では、シユタイナー教育の実践を通じた教育芸術に焦点を当てました。参加者からご質問もいただいたのですが、小生の博士研究であるマルチン・ブーバーの宗教哲学とホリスティックな(Holistic>whole, holy, health)世界観・人間観について(Cf.拙著『ブーバー対話論とホリスティック教育——他者・呼びかけ・応答』勁草書房)、いずれまたお話しできる機会があれば、との思いが残っています。これからのご縁の深まりを祈念しつつ、今回は、やや自己紹介めいた論壇とさせていただきます。

特集

地の塩・世の光として、《神の愛》に根ざす協働体であること  
闇の世の彼方に創る光に

溢れた人間の世  
原 慶子

与えられた“黙想”の時

“想定外”という言葉があるが、まさしく想定外の出来事に見舞われました。四〇年以上元気に走り続けた私が病気になる、三週間足らず入院することになったのです。私はこの一年ばかり考える時が欲しいと思っていました。しかし日々の仕事に追われ、黙想の時は中々見出すことができませんでした。ところが、神様は“病氣”を通して、休息と黙想の時を思いがけず与えてくださいました。治療は先生にお任せして治療に専念する一方、私の魂はソリチュードに満たされ、次々と神の声が聴こえるように、新たな気付きとアイディアそしてこれからの構想が浮かんでくるのでした。「三食・昼寝付き」の黙想は私の感性を研ぎ澄まし、本当に久しぶりに聖霊が私の魂に下ってきているのを実感しました。退院後、朝五時に起床し、入院中の黙想を続けるために、ヴィヴァルディやバッハのパイプオルガンに耳を傾けました。今は、権代敦彦作品集の中の嶋香のピアノ曲を聴いています。

コロナパンデミックの分断 社会

たった三週間ですが、現在の社会状況や諸々の罪に溢れた出来事から完全に遮断されたことは、本当に恵みに満ちたソリチュードタイムでした。再びこの世に戻り、相変わらず、イスラエル(ネタニヤフ首相)は、PACO(パレスチナ解放機構)への武器による攻撃を激化。ロシア(プーチン大統領)はウクライナ(ゼレンスキー大統領)への破壊活動を激化。アメリカもトランプ大統領のアメリカファースト独裁政治、日本は石破茂首相を辞任に追い込み、総裁選挙をするのだという。世界の指導国を自負する先進国のいずれも国外、国内においてエゴイズム丸出し(正義は自国にのみあるという思い上がり)を原因とする闘い―戦争―争いをするのが“本業”となっています。コロナパンデミックはその様な状況を一層悪化させ、今や世界中を富裕層と貧困層の著しい格差と分断に追い込み、救いようのない“闇”が世界をおおい尽くしています。二一世紀も二五年になります。『平和』を願った二一世紀は、アメリカの同時多発テロに始まり二〇世紀以上に経済の豊かさに胡坐をかいた

傲慢な、「神のみ心」にそむいた悪魔が支配する人間社会となりました。

権代敦彦(一九六五年生まれ、作曲家)作品集「きらめく光のとき―祈り When the Light Shines ― a Prayer」に耳を傾けた時、私は、人間の暴力が吹き荒ぶ地球上に、天よりの光が必死に照り輝いているのを感じたのです。ピアノソロは中嶋香です。彼女も天からの音色を出しています。「狂ったように、狂ったように、私も光を求める(二〇〇一)

この小さな半島で、侵略、戦争、反乱、悪疫、飢餓のために死んでいった、あまたの人々の恨みに満ちた哭声。その声の媒体。制御された、必死の自己表現としての何か短い叫び―(権代敦彦)「愛の熱い熱い愛の、火花のような愛の言語。私は私の詩がそのようなことになることを願ってきた。(金芝河)すべてを貫く動力は、愛“である。”

戦いに溢れた人間の歴史(生命四〇億年)において、地球と人間の歴史が崩壊せずに継続してきたのは、有名無名を問わず「光を求め、愛を動力として生きる人間」が少なからず存在してきたからだと思えます。私は、そう信じてずっと新生会の仕事をしてきました。

「聖霊」と「真善美」と「知情意」

私は、表題の四つの言葉を、私の思索と実践の根源の哲学としてきま

した。

「聖霊」は、キリスト教において「三位一体」すなわち「神・イエス・聖霊」のことです。「聖霊」は「イエス」が神の独り子であることを証した「聖なる霊」です。人間の魂に聖霊が働きかけて、人間は「神のみ心」をイエスを通して理解するようになります。

「真理」は「神の智慧」です。世俗的な科学に基づく知恵ではなく、宇宙の真理に基づいた智慧なので、従って「聖霊を宿した真善美」が偽りのない「真善美」であり、「真理を宿した知情意」が本物、本質的な「知情意」であると思います。

光と闇

子供の時は、闇を意識しなかった。多少つらいことがあっても、天からの光が闇を追い払う

大人になって闇が広がり世界も人間も闇の世界に安住するようになった。

神と悪魔

悪魔がイエスを誘惑したように、物質的富をちらつかせて、神に背く人間を増やそうとする。

それが巧みな悪魔の誘いと気づく人間をもっとも増やさなければ!

神の愛・神の智慧

聖霊を通して、神の愛をいただき、真理を通して、神の智慧を認識する。すべての地球人間がそうなるように!私の夢は天に届くだろうか?



二〇一五年八月六日  
逝去記念礼拝奨励

穂和の園 鎌田 一志

原正男先生、ツヤ先生は明治三十九年生まれ。正男先生は八月一日にお生まれになり、平成一年八月六日九三歳で天に召されました。ちょうど広島原爆慰霊祭の中継をご覧になっていらつしやいました。その時、榛名は晴天にもかかわらず突然の激しい雨に見舞われ、驚いて空を眺めたことを思い出します。

私が就任して間もないころ、先生は「どうしてこの仕事を選んだのかね」と穏やかに尋ねられました。「人と人との間で仕事をしたかったからです」答える私に「そう、それは良い仕事を選んだね、頑張りなさい」と励ましてくださいました。確かにその通りで、未熟であるがゆえにつらいことがあっても、嫌な仕事と思ったことは一度もありませんでした。

当時先生はセンターで昼食を召し上がっており、そこで食べる職員が少なかつたこともあって、よくテーブルをこ一緒させていただきました。しかもほぼ毎日。これには当初大変緊張しましたが、先生の方からごく自然に接し

てくださったので、随分甘えてご一緒させていただいたように思います。当時居住者、職員合わせて七〇〇名を超える組織のトップと一介のケアワーカーが、毎日のように昼食を共にする。他は知りませんが、そんなことが自然にできる組織はそう多くはないのではないのでしょうか。新生会が比較的風通しよく自然体でいられるのは、そんな先生のスタイルが組織の中での脈々と生きていくからだと思います。

戦時中のお話には、県庁へ食料のお願いにゆき「貴様、このご時世をなんと心得る。結核患者ごときに供する食料はない」と言われたというエピソードがあります。いま我々はお米や卵がスーパーから消えただけで不安になりますので、本当に想像を超えるご苦労であつたんだろうなと思います。

「すべてのこと相働きて益となる。」この言葉も教えて頂き、色々な困難にあつても、大丈夫、なるようになる。と思つて乗り越えていくことができました。そして大抵のことは「我をより高き崖下に置き」と天に叫んだ先生のご苦労と比べれば、大したことはないと思えるのでした。

今年には昭和百年。広島や長崎の原爆投下から八〇年がたちました。私達は沢山の居住者と出会う中で、その方がいま抱えている問題は勿論、

その人生にも思いを馳せ、かつての喜びや悲しみと出会い、日々の積み重ねが今に至っていることを理解します。一つ一つは個人の人生でありますが、全体を見れば大きな時代のうねりとなります。そして、このうねりは、多くの尊い命が奪われていった、あの八月六日と地続きであるという厳然たる事実なのです。

かつて居住者にSさんという優しく穏やかなエンジニアの方がいらつしやいました。認知症になられても戦争のことは良く覚えていて「二〇〇名の部隊に武器はわずか小銃一〇丁。そんなんで何ができる。それでも東条はアメリカと戦えといった。今でも許せない！写真を見たら土足で踏んづけてやる。仲間に対して本当に申し訳ない。」そんな気持ちはずっと六〇年以上最後までありました。つらい思いをされた方は沢山いらつしやると思います。

いま世界では分断が進み、権力者が自国のエゴを掲げ戦禍が拡大しています。日本でも先の選挙において、日本人ファースト、核兵器は安上がりだ、などと主張する政党が議席を伸ばしました。一方、SNSやマスコミもつまらないことを無責任に騒ぎ立て炎上するなど、社会からは寛容さが失われてしまったように感じられます。「わかれ争うとき家も村も滅びる」榛

名荘新生会はこの言葉と対極にあります。この夏も沢山のボランティアが来会しました。彼らは居住者と言葉を交わし、その日の出来事を職員と振り返りながら、翌日も新たな出会いを積み重ねます。朝礼で挨拶をしてくれた高校生たちからは、看護師になりたい、ケアの仕事がしたい、栄養士になりたいなど、訪れたことをきっかけに、それぞれの夢を膨らませてくれました。

榛名荘新生会の歴史、それは、相手のことを考え、お互いを理解し、育みあい、同じ目線に立ち、笑いあい、励ましあつて積み重ねてきた歴史であります。そこに育まれているのは大いなる愛です。愛に満ちた豊かなフィールドが、人が活き活きと生きる場所として本当に喜ばれる天国の待合室となっているのです。

私が結婚した際、原先生からこんなメッセージをいただきました。「人生における最高の幸せとは、全身全霊で愛する人と出会い、愛を交換しながら共に生きること」正男先生、ツヤ先生ご夫妻の人生こそ、まさにこのメッセージを体現されたものではなかったでしょうか。

大いなる愛をもちいて、人々の希望となる、この場所を守り育むことが、今に生きる私たちにできることなのではないかと改めて思つたのです。

### 『創立六八周年記念式』

去る七月三〇日、ホテルメトロポリタン高崎において、社会福祉法人新生会の創立六八周年記念式並びに祝会を執り行いました。

記念式では来賓を迎えて、新生会の創立当初より変わらず運営してこられたことへ改めて感謝すると共に、長年にわたる勤続に対して、功労と貢献を称え、勤続五年から勤続三五年までの節目にあたる職員の永年勤続表彰を行っています。今年は三八人の職員が受賞され、被表彰者を代表し、新生の園の柳沢啓一園長が謝辞を述べられました。



『ご来賓の皆様と永年勤続者での記念撮影』

### 教 養 講 座

八月五日に桜が丘芸術ホールにおいて公開教養講座が開催されました。今回講師としてご講演いただきましたのは大阪公立大学名誉教授でいらつしやる吉田敦彦先生です。『問いを生きる』シュタイナーの教育芸術に学ぶ』という演題で、シュタイナー学校とその教育について、実際の映像や事例を通してわかりやすくお話してくださいました。



吉田先生

「誰かから与えられた答えを生きるのではなく問いを生きる。」ご自身も哲学の授業を担当されている先生の講演は現代、過去、そして未来の教育、さらに教育を通してどう生きるかを学ぶということに広がりしました。当日は居住者の皆さん、職員、またボランティアで来会していた学生も聴講させていただいていますが、それぞれの時代で異なった教育を受けてきた方々一人ひとりの心に響く教養講座となりました。

八月二日には今月二回目となる公開教養講座が開催されました。今回は富岡幸一郎先生（関東学院大学教授）をお招きし『平和への祈り』

内村鑑三の非戦論』という演題にてご講演を頂きました。群馬県ではお馴染みの上毛かるたに「心の燈台内村鑑三」として登場します。富岡先生は『内村鑑三全集』を読む中で心を動かされ、聖書からくる力強い言葉が内村の根源にあることに気が付かれます。内村は非戦論を説く中で、「世界の平和は主の降臨を以て至る」「人類の希望としての再臨信仰」とキリスト教を通して、あらゆる暴力と破壊に抗議しました。そして、「平和は戦争を廃して来ります、武器を擱くこと、是れが平和の始まりであります」と訴えました。



富岡先生

当日配布された資料は文語体で書かれた内容でありましたが、富岡先生が分かりやすくお話下さいました。戦後八〇年という節目の年を迎えた八月に、あらためて平和について考える良い機会となりました。

### ファミリースummerキャンプ in 新生会二〇二五

八月八日・九日、今年も待ちに待った子供たちの夏の一大イベントが無事開催できました。コロナ禍を経て、昨年度から再開された同イベントは、リピート率が高く、新生会内（ご友人含む）のお子さん参加者四名、親御様、アルバイトの学生・実習生さん、職員合わせ約百名と大賑わいになりました。

実施拠点は「心泉の家」ここを中心として、各々の実行委員が考えたレクやHALC自然学校観察員の国安さん、坂本さんに連日お付き合ひいただき、皆、休む暇もないぐらい楽しみ尽くしましたね。

宿泊の部では、夜のマリヤの森のカプトムシの大軍を発見した時の驚きやワクワクが止まりませんでしたね。皆の笑顔が、新生会の職員他、居住者の笑顔につながります。元気いっぱいの子供達、また来年もお待ちしております。



# ホームアクト

介護付有料老人ホーム  
新生の園

グンマの夏 攻略法

国内過去最高気温を記録した群馬の夏は特に暑い…。そんな夏に負けない為にはパワーをつけるしかない！と、新生の園一行は美味しい物を探す旅『グルメの会』へ出かけました。

暫くバスに揺られていると、何やら良い匂いがしてきます。吉岡町にある「ひょうたん」へ到着です。牛タンハンバーグがメインのランチプレートをご用意。旨味溢れるジュシーなハンバーグを口いっぱい頬張り、至福のひと時を過ごしました。

スタミナが満タンになったところで、一行は「三津屋古墳」にちょっと寄り道。全国的に珍しい八角形の古墳で、復元された内部を見学。石室の中は薄暗く、外とは別世界のよ



お子様ランチではなく  
“大人ランチ”

うに涼しくなっています。古墳が古墓であると説明すると、「えっそうなの？」と驚かれた居住者もおり、別の意味でもひんやりしたかもしれませんね。

長い旅も終盤戦。和雑貨店「時代屋」へ。まず目に入るのは、入り口にある世界一大きなつるし飾り。手作りの縁起物が一万三千五五六個つるされており、ギネス記録にも認定されているその姿は圧巻です。店内には手作り雑賀やお菓子が置かれ、しばし買い物を楽しみました。旅の締めには冷たいソフトクリームでクールダウン。あれだけ満腹だったにも関わらず、甘いものは別腹なよう、ぺろりと完食。身も心もパワーを蓄え帰路につきました。

群馬には美味しい食べ物がたくさん隠れているそう。未知なるグルメを探して、新生の園一行の旅はまだ続きそうです。(石橋優介)



いくつになっても、  
今日は17才の気分！

# 健康型有料老人ホーム マリヤ館

夏から秋へ 思い出を重ねて秋風に心地よさを覚える季節となりました。皆さまいかがお過ごしでしょうか。梅香ハイツマリヤ館での、この夏の思い出を皆さまにご紹介いたします。

七月一八日には、梅香ハイツ創業五〇周年記念会が開催されました。今回は、マリヤ館にお住まいの居住者様がハープを演奏してくださいました。澄んだ音色は会場いっぱいに広がり、参加された皆さまの心をやさしく包み込みました。五〇年を振り返りながら、これからも皆さまと共に歴史を重ねていきたいという思いを新たにいたしました。



「創立50周年記念会」

八月二二日には、グルメの会で磯部築を訪れ、夏の風物詩である鮎料理を堪能いたしました。清らかな流れを間近に眺めながら味わう鮎は格

別で、参加された皆さまの笑顔が一層輝いておりました。自然に包まれながら味わう季節のご馳走は、心身を癒す特別な時間となりました。



「磯部築にて」

マリヤ館では、四季折々の行事を通じて、居住者様の暮らしが豊かに彩られるよう、また健やかに過ごしていただけるよう努めてまいります。実りの秋から、ぬくもりあふれる冬へと移りゆく日々も、どうぞ健やかに過ごしてください。次号も施設での生活の様子をお伝えいたしますので、ぜひご期待ください。

(原 孝洋)

介護付有料老人ホーム  
穂和の園・桜の園

トワイライトフェスタ

穂和の園と誠の園合同、桜ヶ丘の夏祭り「トワイライトフェスタ」が開催されました。当日はヨーヨー釣りや輪投げ、射的などのアトラクションに利用者の皆さまは童心に返ったように真剣なまなざしで挑戦し、景品を手にした瞬間には満面の笑顔が広がります。バーベキューの香ばしい匂いに誘われて、ボランティアの方々の明るい掛け声でさらに賑わいを見せていました。

夕暮れになり、打ち上げ花火が上がると拍手と歓声が響き渡り、皆さまの表情は喜びに包まれていました。他施設から訪れた方々も、桜ヶ丘ならではの温かな雰囲気と笑顔に触れていただき、暑い夏の終わりに穏やかなひとときを過ごしていただけたことと思います。（宮永 卓）



狙うは1等賞!?

梨狩り?

残念ながら爽やかな晴天の中とはならず、予想以上の大雨に急遽行き先を変更し喫茶に出掛けてきました。パフェにクリームあんみつ、ケーキに目移りしながら、「久しぶりに食べたけど美味しいわね」と温かい飲み物と一緒にゆったりとした時間を過ごされていました。

そろそろ帰ろうかと準備をしていると、ちょうど雨が上がり予定通り「悴田梨園」に立ち寄ることができ、皆さんお目当ての大きな梨や梨のジヤム等をお土産に沢山買われていました。

雨の中の梨狩りでしたが、「楽しかったわ!また一緒に思い出作り行きましょうね。」と満足いただくお出掛けができたようです。



結果オーライ

(安原 円)

介護付有料老人ホーム  
恵 泉 園

『夏の風物詩』

毎年恒例となっているジョージが丘サマーフェスティバル。今年も新生の園、エンジェルホームと一緒にジョージが丘全体で盛り上がりつつありました。例年では花火の時間になると雨模様になってしまいうことも多かったですが、今年は天候にも恵まれ無事に行うことができました。



美味しいね!

ビールに焼き鳥、かき氷、スイカと毎年定番となっているメニュー以外にも今年はフランクフルトや駄菓子なども加わり参加者からは「夕食を控えておくべきだった」「もうお腹いっぱい」と大満足の様子でした。お腹も膨れたところで始まったのは職員によるアトラクション「マツケンサンバ」。踊りだけではなく本物そっくりな歌声で観客を大いに沸かせました。居住者の方も音楽に乗っ

て手拍子をしたり、誰が躍っているのか目を凝らしている人、こっそり写真を撮っている人。みんな思い思いに楽しんでいた様子です。

出し物も終わり会場の熱気も盛り上がったところで、いよいよクライマックスの花火。次々と上がる花火に大興奮。「キレイだね」「また見たいな」とたくさんの方に喜んでいただきました。



キレイだね~

今年は恵泉園の居住者も初めてサマーフェスティバルに参加される方が多く、「想像していたよりも豪華でビックリした」「これ、本当に毎年やっているんですか?」「来年も是非参加したい」と大興奮の中、無事に終わることが出来ました。

(村山 暁彦)

軽費老人ホーム  
バルナバ館

七夕飾り

今年もバルナバ館恒例の七夕飾りを行いました。七夕は元々は旧暦の七月七日に行われる行事ですが、この辺りでは新暦に飾るところが多いようです。



今年も綺麗に飾れました

共愛学園高等部より五名のボランティアの生徒さんと一緒に館内のホールや各階の談話室に飾りました。折り紙の飾りを見て生徒さん達は「これ折ってみたいです。昔手裏剣を折ったけど今でも折れるのかな？」とか「この飾りはどこに飾ればいいですか？」と居住者の方達との会話が聞かれ、明るく楽しそうな時間が流れました。館内のホールに飾られた、たった三文字の『生きる』と書かれた短冊が、エアコンの風に揺られていました。（二場寿子）

おしゃべりの会・発足

今年三月、居住者の半田純江様より「バルナバ館の居住者の方と気兼ねなくお話をしたりお茶を飲んだりする時間を作りたい。」というご提案がありました。かつては居住者の方達による「ペチュニア会」という自治会があり、縦横のつながりを深め、生活のルールを決めたり懇談する会がありました。居住者の高齢化に伴い、一九九九年三月解散。

あれから二十六年が経過しました。そして八月八日、その流れを引き継ぐように、第一回目のおしゃべりの会・発足。「部屋にずっといると鬱々することがある。たまに誰かと話せばいいなあ。」「入居して間もないが顔とお名前が一致しないのでこの機会は嬉しい。」居住者の方主体のこの会が今後も続くこと、創立五〇周年を迎えたバルナバ館が大切にしてきた「温かさ」が継承されていくことを祈ります。（山崎祐子）



楽しい時間です！

軽費老人ホームA型  
榛名春光園

「夏祭り」

八月六日、毎年恒例の玉川聖学院の学生ボランティアと居住者との夏祭りが開催されました。学生の皆さんが提灯や手作りの花を飾って、お祭りらしくなった会場に総勢六八名の居住者が集まりました。教頭先生の乾杯でスタート。夕方五時からということもあってまずは腹ごしらえというところでバイキング形式の食事

が始まりました。調理スタッフが腕によりをかけて作った和洋中のお料理そしてケーキやフルーツがテーブルに所狭しと並べられました。「鰻ご飯が美味しい、お刺身をもつと食べたい、生ビールおかわり」と、とても満足された様子でした。



美味しいお料理と楽しいお喋り

続いてはいよいよ待ちに待った学生の出演です。浴衣やはっぴ姿での登場にますますお祭りムードが高まりました。唱歌の合唱が始まると優しい歌声に皆さん聴き入って涙ぐまれる方もいました。そして素敵な歌声の後は学生が居住者の席に移動し歓談。会話が弾み皆さんの笑顔が印象的でした。

賑やかなお祭りのフィナーレは居住者、学生、引率の教員、職員が参加しての盆踊り大会です。炭坑節と東京音頭を踊りました。大きな輪になり事前の練習の甲斐もあり大盛り上がりとなりました。今年もこうして学生主体のお祭りが開催できました。涙あり、笑いありとても温かくて楽しい時間となりました。夏の素敵な思い出になりました。（山田和恵）



これも恒例、揃っての記念写真

特別養護老人ホーム  
榛名憩の園

## 「夏祭り」

今年も厳しい暑さでしたが、「暑さに負けず元気に夏を楽しもう！」と、榛名憩の園では毎年恒例の夏祭りを開催いたしました。職員お手製の装飾を飾り、お祭BGMを流し早くも会場はお祭りムード満点です！はじめに夏と言えば、やっぱりかき氷とアイスクリームということので皆さんに召し上がっていただき、涼を感じていただきました。

次に、ビーチボールを使ったボール遊びをしました。居住者皆さんで大きな円をつくり、真ん中に職員が立ってボールを投げ合いました。最初は緊張しているせいか控えめな動きでしたが、だんだん大きくなる掛け声と歓声により、自然と体も大きく動くようになりました。職員はヒヤヒヤとする場面もありつつも、皆さんが子供の頃に戻ったかのように生き生きとされ、自然と会場全体が



緊張の瞬間

笑顔で溢れていました。

そして、最後の催しは夏の定番スイカ割り。最初の挑戦者は、この日のためにスイカを持参してくださいました職員の娘さんでした。皆さんから見守られながら、目隠しをしてお父さんに後ろから付き添ってもらいながら、会場の掛け声を頼りに思い切り棒を振り下ろしました。残念ながら割ることはできませんでした。目隠しを外して残念そうにする表情や恥ずかしそうに照れている姿がとても可愛らしく温かい気持ちに包まれました。そして、スイカ割りの締めくくりを飾ったのは、我らの主砲Uさん。渾身の一撃で見事にスイカが割れ、拍手喝采！切り分けたスイカを皆さんで頬張り夏らしいひとときを締めくくりました。

榛名憩の園では、これからも四季折々の行事を大切に、居住者皆さんとかけがえのない時間を共有できるように努めていきたいです。

（江口裕輔）



夏らしい一枚を

特別養護老人ホーム  
誠の園

## 「HANABI」

今年も結構お出かけしていて、外出することは普通でしょ！という空気の誠の園です。毎週金曜日は基本的にイベントを行っており、ペラペラ清掃や花壇の手入れ、ドライブに買い物、個人的にお目当ての場所に行ってみることなど勢い八〇％で続けていきます。

毎月開催している懇談会でも皆さまからの貴重なご意見やリクエストを伺いながらイベントと一緒に考えています。そこで今回提案されたのがそう「花火大会を現地に行ってみてみたい！」です。

はるなの花火大会は今年で四二回目という毎年恒例の地元の一大イベント。有名なようであり知られていない。知っているけど参加したことがないと、職員からも話がありました。実は六場の花火大会なんです。

八月一五日（金）夕飯を済ませてからいざ出発！現地ではいつもお世話話になっている多胡商店さんをはじめ、地元の皆さまにも絶大なご協力をいただきました。参加された方たちは会場までの暗い道を進みながら、浴衣姿の若者とすれ違い、蒸し暑い夏の夜にこれから打ち上がる花

火を心待ちにして、子どものようにワクワク・ドキドキされていました。

会場に到着すると用意されていた席は来賓席。おかげさまで花火を真下から見上げるVIP席。打ち上がりと同時に胸を打つ大きな音に動悸か?!とびつくりしながらも、夜空に咲く大輪の花にしばし見とれていました。「今年の花火も終わったね」と話しながら満足した一行は帰路につきましました。

翌日感想を伺うと「近すぎて首が痛くなった。もう来年はいいや。」との一言に愕然としつつ、二週間後に行われた桜が丘花火大会もしっかりと楽しみました。

（小野沢剛昌）



### 特別養護老人ホーム エンジェルホーム

#### エンジェル喫茶

虫たちが奏でる音色が、エンジェルホームに秋の訪れを感じさせる季節となりました。

九月一五日、敬老の日になんで、人生の先輩方へ日頃の感謝と尊敬の気持ちを込めて、エンジェル喫茶を開催しました。コーヒーメーカーでコーヒーを淹れていると、ホーム内が良い香りに包まれ、ジャズをかければ、某人気コーヒーショップに負けないくらいの素敵な空間になります。神宮ケアワーカーが淹れてくれる美味しいと評判のコーヒーと、園長厳選の和菓子の用意が整えば、エンジェル喫茶の始まりです。七種類の和菓子の中から好きなものを選んでもらいます。「どれがいいですか？」とたずねると、「どれもいいねえ。迷っちゃう」と、和菓子選びも楽しめました。美味しいコーヒーと和菓子におしゃべりも弾みます。



見た目も楽しい  
おいしい和菓子



素敵な紙芝居

お腹も心も満たされたところで、園長による紙芝居のはじまりはじまり♪紙芝居のタイトルは、『注文の多い料理店』と、『てぶくろを買いに』です。園長を囲むように居住者の方が集まります。紙芝居が始まると、園長の心地よい声のトーンと、まるで登場人物になったみたいなきき返りで、みなさん物語の世界に引き込まれているようでした。みなさんとても集中して聞かれており、昔を懐かしみ、童心にかえって楽しんでくださったと思います。

ささやかな時間ではありましたが、居住者の方々と笑顔あふれる時間を過ごすことができました。これからもエンジェルホームでの生活が、穏やかで心豊かな毎日になるよう心がけていきたいと思えます。

(閑忍)

### HALC自然学校

#### 七・九月のお出かけ自然体験

「はるな自然体験クラブ」のお出かけ企画は隔月に実施しています。

七月九日は群馬県立自然史博物館と高崎市少年科学館（プラネタリウム）へ。気温三五℃超えでしたが館内で快適に過ごしました。

七月一七日は標高千mを超える清里（八ヶ岳自然ふれあいセンター）へ。当日は生憎の雨模様、キープ協会の坂川さんのご案内で一時間程の自然観察会、その後清泉寮巡りに変更しアンデレ教会やポールラッシュ記念館を視察しました。



清里聖アンデレ教会にて



プラネタリウムで快眠

九月四日は北毛の玉原高原へ行く計画でしたが、雨の影響で花寺の吉祥寺と川場田園プラザ、川場歴史民俗資料館へ予定を変更しました。

九月一〇日は曇り空の中、榛名湖周遊しながら、伊香保森林公園のワシの巣風穴へ散策。昼食は伊香保温泉街の洋風旅館ピノンで、午後は榛東村の耳飾り館を見学しました。

(稲垣仁)



伊香保森林公園ワシの巣風穴



川場村ふれあい橋から見た田んぼアート

ボランティア研修宿泊施設  
心泉の家

たくさんの出会いに感謝して

今夏、ボランティアとして数多くの学生・生徒さんに新生会まで足を運んでいただきました。今号では、新島学園短期大学「ボランティア活動」引率の臂奈津恵先生より寄せられたメッセージをご紹介します。

「今年も新島学園短期大学の集中講座を受け入れて下さり、心から感謝いたします。今年は履修者が少ない中でしたが豊かな経験をさせて頂き、宗教主任として大変にありがたい機会となりました。以下、学生たちの感想の一部をご紹介します。「このボランティア経験を通じて、私は介護とは単なる業務ではなく、人の人生に寄り添う責任であり、覚悟を伴う仕事であることを学びました。『最後までお世話させていただく』という誓いが、ただの言葉ではなく、現場で実践されている現実にもふれることで、その重みと尊さを強く感じました。そして、高齢者の方々の笑顔や丁寧な生き方に接することで、私自身の人生観や『生きるとは何か』という問いに向き合う時間にもなりました。」（一年生・K）、「ボランティアという名目で参加したものの、実際には私たちの学びのために職員の

方々が時間と手間を割き、丁寧に寄り添ってくださったと実感した。とりわけ、毎日伴走してくださった櫻井さん、松田さん、関さんには心からお礼を申し上げます。お忙しい中、拙い質問にも一つひとつ向き合い、ふり返りの時間を設けてくださったおかげで、安心して挑戦でき、確かな成長につながった。この経験を忘れず、自分にできるかたちで人と社会に還していきたい。」（二年生・E）

学生たちは最終日の朝礼に出席させていただきました。チャプレンの鈴木先生の「スピリットだよ、大事なのはスピリット！」と胸を手で叩きながら語られた言葉は篤く、どのような支援制度が整っても人の行うことには心が必要であることをお教えいただきました。学生たちがここでのスピリットを糧として、これからの歩みを人と神に仕えるものであることを祈ります。尊い経験を与えて頂き、ありがとうございました。」

来年の夏もまた、すてきな出会いを楽しみにしています。（櫻井淳司）



最終日に  
友愛広場にて  
ワーク

## あんしんセンター新生会

活動紹介 「通いの場」

あんしんセンター新生会では毎年度、室田地域の六五歳以上の方を対象に「いきいき運動教室」を開催しております。フレイル予防を主な目的としたこの教室も、二〇一五（平成二七）年度から回を重ねること早一〇回。これまでに延べ一五〇名以上の方にご参加いただきました。

センターでは教室を修了した方へのフォローとして、運動習慣と交流の継続を目的とした「通いの場」づくりにも力を入れております。センター職員との係わりがなくてもご自分たちだけで運動を続けられるよう、センターから事前にプログラムを提示。運動教室を修了した方であれば、スムーズに取り組める流れを作っております。

現在教室修了後の通いの場として、室田地域では二グループが活動中。他にも三グループが通いの場と同じ内容で活動が続けています。この内の一つ「ゆうすげの会」は、二〇二四（令和六）年度の運動教室後に始まったグループです。活動内容はおなじみのラジオ体操やテレビ体操から始まり、高齢者向け筋トレメニューの鬼石モデルを行います。ま

た、運動後に始まる茶話会も活動の大切な柱。飲み物を片手に、参加者の方からも自然と笑みがこぼれます。

通いの場の参加率について、厚生労働省の推進目標では二〇二五（令和七）年には高齢者人口の八%を指すとされています。高齢者人口が約二四〇〇名の室田地域では、約二〇〇名の方が通いの場と接点を持つことが望ましい計算になります。主に行政区単位で開催中の「ふれあいいきいきサロン」も含めて考えると室田地域においては概ね達成できている印象ですが、センターとしては運動教室の開催と修了後の「通いの場」づくりにも、引き続き力を入れていきたいと考えております。

誰もが気軽に介護予防活動に参加できる環境づくりを目指して、職員一同これからも頑張ります。

（高林正洋）



ゆうすげの会  
メンバーのみなさま



# このひと

新生の園  
酒井 友子さん  
(九九歳)



今回は新生の園にお住いの酒井友子さんを紹介させていただきます。

酒井さんは大正一五年三月生まれ。「静岡生まれの静岡育ちです。大したことは何もありませんがよろしくお願ひします。」とおっしゃり、遠い記憶を一つひとつ確かめるように思い出しながら丁寧にお話してくださいました。

五人兄妹の末っ子として静岡で生まれ、私立静岡精華女学校で学びました。静岡精華女学校は現在の学校法人静岡精華学園の前身で、酒井さんの祖父である杉原正市さんが創立、父の市蔵さんも校長先生をされた学校だそうです。両親共に教育者で、勉強をしろと言われたことはなかったけれど生活態度や行儀など大変厳しかったということ。女学校を卒業後は日本銀行にお勤めになりました。そして同じく日本銀行に勤めていたご主人と出会い結婚されました。結婚後は家庭に入り、専業主婦として子育てに励みました。

長い人生の中で特に心に残っているのはまだ小さかった頃にお母様が結核を患い亡くなってしまうことだそうです。またクリスマスチャンスの家庭ではなかったけれど近くの教会によく行っていたそう

で、キリスト教に出会ったことは人生において大きなウェイトを占めていて、早くに母を亡くして孤独を感じていた時や、人生の中で手に負えないような大変なことに直面した時にも信仰が大きな支えとなったそうです。新生会との出会いも教会関係のつながりで、神様のお導きとおっしゃいます。「キリスト教の勉強はしていないからダメな信者です。」といいながら今でも毎週日曜日には榛名聖公会教会へ通っていらっしゃいます。

令和四年一月に新生の園にご入居してからお友達もできて毎日を充実して過ごされています。施設の行事はもちろん、法人で企画する群馬交響楽団のコンサートツアーにも参加され音楽を楽しまれています。「昔から音楽が好きで、それは音楽万能だった父の影響かもしれない」と笑ってお話してくださいました。「長生きの秘訣はよくよくしないこと、(ちようど) いい加減でいること」だそうです。これからもお元気で過ごしていただけるようサポートさせていただきますと思います。

# ひとの和

共愛学園中学・高等学校 教諭

原田 恵 先生



「教育とは、知識を教えるだけではなく、心を育てる営みです」。生徒たちが自身を見つめ、他者と共に歩む力を身につけるために、教員自身もまた成長し続けなければなりません。と熱く語ってくださいしたのは共愛学園中学校の原田恵先生。いつも元気で明るく優しいそのお人柄は新生会でも有名。夏の共愛学園ワークキャンプでは彼女の来会を待ちわびている居住者や職員も多くいます。

この授業は原田先生にとって今でも大きな学びの場となっているそうです。毎年夏に行われる共愛学園高等学校ワークキャンプには必ず帯同され、誰よりも近い距離で生徒を見守り、支えてくださっています。「一人ひとりが成長する姿に感動する。この体験は生徒の心に深い影響を与えており、この貴重な体験を与え支えてくださっている新生会には深く感謝しています。」と話してくださいました。

教育とは、本人の努力だけでなく、周囲の支えがあつてこそ育まれるもの。共愛学園の精神である【共に愛する】【共に生きる】この理念を次世代に継承するため、私の体験と想いを丁寧に伝えていきたい。そしてこの学び舎が子どもたちにとって、「自分の子どもも通わせたい」と思える場所となるよう、心の教育を続けていきたい。と原田先生は語ります。

原田先生は、知識だけでなく「心」を育てる教育を大切に、生徒一人ひとりと真摯に向き合いながら、共に成長することを目指されています。共愛学園の理念を体現し、次世代へとつなぐその歩みは、これからも多くの生徒に大きな影響を与えていくことでしょう。

文 芸

春光ギャラリー



榛名春光園  
牧 中子さん 作品

春光園で生活をされている牧さんは、信仰の証として、命や希望への祈りを込めた心象風景を描かれています。その個性的な作品は、個展へ来られた多くの方々から高く評価されています。

絵に導かれて40年以上の月日が流れました。県展や市民展での受賞歴を持つ牧さんは、次回、群馬県立近代美術館にて11月22日（金）より群馬県美術展覧会にて作品を出品します。

ご興味のある方、ぜひ足を運んでみてはいかがでしょうか。



ブネウマ（風、息吹き）



インマヌエル（II）



インマヌエル（I）



宇宙の調和



光の中へ

私は叔母の勧めで保育の専門学校で学びました。でも当時、保育の就職はなく、そんな時に出会ったのが新生会でした。子供と老人と分野は違えど、人との関りである福祉の分野。周りから言われる面倒見の良さは、



ケアに生きる  
(158回)  
穂和の園  
サブチーフケアワーカー  
加藤 徳之

発揮できるのではと入職しました。以来、毎日が楽しいことばかりじゃないですし、大変なこともたくさんあります。でも、これが私の仕事なんだと思いつつ、なにかと、気づけばもう三七年を迎えました。

この仕事をずっと続けてこれたのは、私だけの力じゃなく、周りにいた仲間や、そして何より、たくさんのお入居者さんとの出会いがあったから。嫌な思いももちろんあるけれど、それも全部ひたひたに承めて、私の人生の一部になっていくんだと思います。

入居者の方々や、仲間とのコミュニケーションは大事にしてきました。時に元来の口下手ですが、うまく伝わらないこともありましたが、気持ちを持って、ただ、毎日を精一杯生きて、目の前の人たちと向き合ってきた日々です。でも、それが誰かの役に立っているなら、こんなに嬉しいことはないです。これからも、私なりに「ケアに生きる」道を歩んでいこうと思っています。

詩 歌

福田 絢晴

郷愁の土手染め咲きし彼岸花

秋行くや榛名の月日も十年に

出会いのあれこれ 笠井 昭次

あじさいの紫溶けて宵の闇

青空に何時しか溶けゆく蟬時雨

空の果て海果ておぼろ夏盛り

果てしなく夏空に踏み入る海の碧

鈴木 桂子

移り住む榛名の麓盆の月

鳴りわたる夕べのチャイム白木樫

カルデラの湖へとつづく大花野

オーサム

オーサムのファンの為にも四苦八苦

バスの中携帯会話睨まれる

求道は道を求めることなりき

この道は通って来たと思いつく

若者の階段登降まるやかさ

マリヤ シュガー

白菊の慰霊の花火打ちあがり

鎮魂の夏 始まるふる里

科学館 プラネタリウムと巡り学び

今日の気分は 小学生なり

和紙になる楮の木とはこの木かと

赤い実含めば 甘さ広がる

憩 泉

姉逝きて白の曼殊沙華そそと咲き

風にゆられて別れを告げる

